

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿 + 源氏解説

連載第 57 回 第 11.3.1.4 節～第 11.3.3.1 節

2020 年 5 月 1 日

小 田 勝

第 11 章の今までの所の補足から。第 11.2.2.3 節 (324 頁) について、次例は「[宇多上皇ガ石山寺カラ都ニ] 帰らせ給ふ [道中ノ] 打出の浜」の意である。

・帰らせ給ふ打出の浜に、世の常ならずめでたき仮屋どもを作りて (大和 172)
327 頁の用例 (7) (8) に関連して、次例の「[車ニ] 高う乗る」は、「高い (身分の人が乗る) 車に乗る」の意である。

・さまあしうて、高う乗りたりとも、かしこかるべきことかは。 (枕 259)
補遺稿第 53 回で話題にした「知らず顔」であるが、現代語で次のような表現があった (この「ません」の「ん」も終止形と捉えられるだろう)。

・あいつはいつも平然とした表情をして、五情 (=喜怒哀楽恋) なんか備えていません顔をしている。(尾崎翠「地下室アントンの一夜」『ちくま日本文学 4 崎翠』ちくま文庫 41 頁)

第 11.3.1.3.1 節の 340 頁用例 (12)～(14) の類例をあげる。

・さてまた、常陸になりて下り侍りにける△が、この年頃音にも聞こえ給はざりつる△が、この春、上りて (源・宿木)

同節の 342 頁用例 (34) に関連して、現代語で次のような用例があった。この「の」は「…が演じる」の意で、これは 329 頁 2 つ目の◆ (「小田の馬鹿」「のび太さんのエッチ」などの「の」) にも通じる問題である。

・田中裕子のヒロイン蛍子に、「動物園の飼育係」になるジュリー一沢田研二の三郎青年が惚れる。 (吉村英夫『男はつらいよ魅力大全』講談社文庫 209 頁)

前回の補遺稿で新設した「11.3.1.3.3' 逆同格構文」であるが、次例もそのような句型として読める。

・甲香は、ほら貝のやうなる△が、小さくて、口のほどの細長にして出でたる具の蓋なり。(徒然 34)

さて、347 頁「11.3.1.4 残存型モノ準体句」の続きからである。次例はこの型の特

異なる句型というべきだろうか。

- ・女^{をんながた}方より、その海^{みる}松^{たかつき}を高^{たか}坏^{つき}に盛りて、柏をおほひて出だしたる△柏に〔歌ヲ〕書けり。(伊勢 87)

次例は「忘れ草何をか種」と思ひし〔ソノ種〕は」の意である。

- ・「忘れ草何をか種〔ナラム〕」と思ひし△はつれなき人の心なりけり(古今 802)

347～348 頁用例(11)～(20)の類例をあげる。

・童なる八郎君は、むかひ腹(=正妻ノ子)にて、いみじうかしづき給ふ△が、いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並びたるを(源・真木柱) △=童なる八郎君
用例(16)に関連して、現代語で次のような例があった。

- ・女性にしては大きな手のひらは汗ばんでいて、指の付け根にマメが並んでいる。
(若竹七海『ぼくのみステリな日常』創元推理文庫 47 頁)

なお、吉野弘の「修辭的鑄掛屋」(『現代詩文庫 12』77 頁)は、この「残存型モノ準体句」の表現に注目した詩である。

348 頁「11.3.2 コト準体句」。用例(1a)(2)(3)の類例として、次例をあげておこう。
たしかに勅撰集の選者に、女性は一人もいない。

- ・女のいまだ集など撰ぶことなき△こそ、いと口惜しけれ。(無名草子)

次例のような「準体言+になる」は、現代語では「…コトになる」と表現される。

- ・蚊遣火の下し燻ゆればあぢきなく向かひの里をふすぶるになる(堀河百首)

350 頁用例(21)(22)について、「句+との+名詞」が『源氏物語』にみえないということは、引用した信太知子(2004)の指摘通りなのだが、この句型は『万葉集』にはあるので補足する。

- ・皆人を寝よとの〔宿与殿〕鐘は打つなれど君をし思へば寝ねかてぬかも(万 607)

351 頁「11.3.3.1 ク語法の標準形」。ク語法形は活用語を名詞化したものであるが、もとの格成分を受け継ぐ。

- ・我妹子が 母に 語らく(万 1809)

「ク語法形+思ふ」は、「…と思う」の意を表す。

- ・嬉しけくいよよ思ひて(万 4094)
- ・〔宗弘ハ〕昔の〔妻トノ〕情を改めざらまく思ひとりて(蒙求和歌・詞書)

352 頁用例(9)(10)の類例をあげる。

- ・岩戸割る手力もがも手弱き女にしあれば術の知らなく(万 419)

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（2）

（増註版3頁、新全集17頁）上達部、殿上人なども、「あいなく」^①目をそむけそむけして、「と

ても見ていられないほどの御寵愛の受けようである^②。唐土^{もろこし}でも、このような原因によって^③、世も乱れ悪かったのだ」と、しだいに世間でも、面白くないことだと人がもて悩む、悩みの種になって^④、楊貴妃の例もきっと引き合いに出してしまいそうになってゆくので、（この方は）たいそう具合の悪いことが多いけれど、畏れ多い帝の御愛情がまたとないのを頼みとして、（女御・更衣方と）つきあって（心細い後宮生活をおくって）いらっしゃる^⑤。

（この方の）父である大納言は亡くなって、母である北の方^⑥が、古い家柄の人で教養ある人なので、（以下、次号）

（注）^①この語の解、未勘。「頭の中將を見給ふにも、あいなく胸騒ぎて」（夕顔）、「深うたづね参り給へるを見るに、あいなく涙ぐまる。」（賢木）、「…とおほかたにのたまふを、入道はあいなくうち笑みて」（明石）。これらを見ると、「関係がないのに」という解は当たらないだろう。「むやみに」または「憚らずに・遠慮無く」などの訳語が当たるか。 ^②原文「御おぼえなり」。「おぼえ」は受身の意だから、新全集の「正視にたえぬご寵愛ぶりである。」は誤り。非難が、帝ではなく、この女性（桐壺更衣）に向いていることを読む必要がある。 ^③原文「かかることの起こり」は、「ことの起こり」で一つの連語。「かかること」ではない。 ^④「あぢきなう人のもて悩みぐさになりて＝あぢきなしと人のもて悩む、悩みぐさになりて」。「かけかけしき（＝懸想メイタ）筋にはあらねど、なほさる方のものをも聞こえ合はせ人に思ひ聞こえつるを」（澤標）。 ^⑤原文「まじらひ給ふ」。新全集の「お仕えしていらっしゃる」は「候ひ給ふ」の訳だから、誤り。 ^⑥「母である、父の妻」の意。古典の時代では、母であっても、父の「北の方」であるとは限らないので、このような言いかたになる。